

厨二病だよ黒崎くん

きりたん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世を持つて生まれたオリ主くん

今日もみんなから声をかけられ人気者

ある時オレンジ頭のヤンキーに絡まれた

でもそのヤンキーはただの不良とはちょっと違つていて…：

戦闘描写はありません
わかる人しかわからない

目

次

厨二病だよ黒崎くん
がんばれルキアちゃん
突き抜ける織姫ちゃん
新属性だよ黒崎くん
目を覚ませ市丸くん

42 35 22 14 1

厨二病だよ黒崎くん

俺は空座第一高校に通う普通の高校生だ。

他の人と違うのは前世の記憶を持つてるつて事くらい。

ちなみに自分で言うのもなんだが俺は人気者だと思う。第二の人
生は_{頭脳は大人、身体は子供スタート}強くてニユーゲームつてやつだ。

通学中に電柱の影に隠れてる女の子とか、道に突っ立ってるサラリーマンとか色々と声をかけられる事が多いんだ。

まあ時間もないからちよこつと話してすぐ行っちゃうんだけど、向こうはもつと話したいらしい。

たまにヒソヒソとこっち向いて話してる人たちもいるけど、普通に声かけてくれればいいのにな?

そういうえばたまにオレンジの髪した不良がこっち見てるけどカツアゲには注意しどこう。

まあ学校 자체が不良の多い学校だから俺みたいな普通の学生なんてただのカモでしかないんだろう。

この町は特徴的な人間が多い。ここ日本のはずなのに：

いつも通り学校で授業を受け帰り道、今日も電柱のところで女の子が立ってるから話してから帰る。もうここまでくると日課みたいなもんだな、うん。

おにいちゃんはいつもたのしそうだね

「まあねー、でも結構毎日同じような事しかしてないんだよ」

でも由美うらやましいな
「由美ちゃん小学生くらいだよね? 楽しいこといっぱいあるんじやないの?」

ううん、由美学校いつてないから

知らなかつた。いつも同じ場所にいるから不思議だつたけど学校に通わせてもらつてないのか!?

義務教育を放棄するとはなんて親なんだ。ここ日本だぞ。

「おい」

(しかし俺が何かしたところで由美ちゃんが学校行けるようになると

は思えないし…)

「おい！そこのお前！」

(いや確かに悩める子供相談室とか子供を愛でる会とかに相談すれば：
ん？)

「電柱に向かつて独り言言つてるお前だよ！」

俺は由美ちゃんと話してるから違うけど、電柱に向かつて独り言つてどんな寂しいやつだよ。あんまり友達になりたくないけど顔みたろ。

周りを見渡してみるけど電柱に話してるやつなんてどこにもないな
い。

これはあれだ。見えてはいけないものが見えてる悪い薬とかやつてるやつだ。

君子危うきに近寄らずつて言葉もある。危ない人には近づかない
ようしよう。

あ、由美ちゃんにもちゃんと注意しとかないと。

と思つたらたまにこつち見てるオレンジヤンキーがこつち來た。

「お前だよ！つたく何回声かけさせんだよ」

「うん？何を言つてるのかわからないが俺はお金持つてないから帰して」

「待て待て！そうじやねえ。：お前さ、なんで電柱に向かつて話してたんだ？」

「何を言つてるんだい？俺はこの子と話してただけだよ」

「あー、いや、俺も見えるんだけどよ。なんつーか、そいつつて普通は見えないんだ」

オレンジヤンキーはやつぱり悪い薬やつてるみたいだ。

たぶん俺の顔はすつぐく優しい表情をしていると思う。というか早く逃げたい。

とにかく刺激しないように気をつけてゆっくりと離れる。
あ、肩掴まれた。

「なんだその表情は。お前が何考えてんのか知らねーがそれは誤解だ」

「大丈夫。まだ俺たちは高校生だ。人生だつてやり直せる。良薬口に苦しつて言つてね。苦い薬がよく効くけど、気持ち良くなる薬つてのは身体に悪いんだよ。とにかく俺は帰るね。由美ちゃんもまたね」

なんとか逃げようとしたけどなぜか逃してくれないぞこいつ。しかもやけに違う違うつて否定してるけど何が違うんだ？

あー、わかつた！誰もこのオレンジヤンキーの話に付き合つてくれないからか！そりや誰だつて近づきたくなーよ！なんだ見えるとか見えないって。

話聞くまで帰してくれない気がしたから聞くだけ聞いて開放してもらおう。

どうやら俺がよく話しているのは幽霊で普通の人間には見えないとか、それを見てる普通の人間からは何もないところででかい声で独り言喋つてるから気味悪がられてるとか、そんな内容だつた。

なるほどね。理解した。ただの高校生なら騙されるかもしれないが、こちとら前世持ちだ。

このオレンジヤンキーの言いたいことはすぐにわかつた。

「開放して欲しくば壺を買え」ということだ。もしくはお札とかか。

そういうや前世でも靈が憑いているとか言つてお水買わされそうになつたことあるわ。

とにかくそういうことだつたのか。唆されてこんな事してるのか悪い薬欲しさなのか知らんが彼を救えるのは俺だけということか：

「ヤンキーくん、悪いことは言わない。今すぐ病院へ行くんだ。時間はかかるかもしれないがちゃんと治してくれる。そんな事をしても君のためにならないんだ。いいね？学校には俺からちゃんと伝えておく。元気になつたらまた学校で会おう」

「だから違うんだつて！ひとの話をちゃんと聞け！あと俺はヤンキーじゃねえ！黒崎つて名前があるし、なんなら家は病院だ！」

「ならちゃんと家の人に頼んで治療してもらうんだ。何も恥ずかしい事じやない。今はわからないかもしれないが、将来この経験黒歴史が君の糧になつてくれるかもしれないよ」

平和な島国育ちというのは良い事ではあるんだが危機感が欠如し

ているのは問題点かもしれないな。

とか思つてたらやつぱり違うとの事。どうやら自分も幽霊が見えるから幽霊と普通に話している俺を見て声をかけたらしい。

ただのヤンキーだと思つてたらスピリチュアルヤンキーだつたとは。

悪いとは言わない。彼にも何か耐え難いトラウマがあつて空想の世界しか逃げるところがなかつたんだろう。

そう考えるとオレンジの髪は黄色信号から赤信号危険になる前という比喩か。

そうやつて外部に近づかないでくれと示しながらもやはり1人は嫌だから誰かを求めてしまうんだな。

俺みたいに老若男女問わず話しかけられる人間ならば話しやすいと思って期待を込めていたのだろう。

その期待には応えてあげたいところだが黒崎くんだけに構つているわけにもいくまい。

ひとまず今日のところは納得いくまで話を聞いてあげて満足させてあげよう。

「あー、黒崎くん。君の話はちゃんと聞くから場所を変えないか?このままじや由美ちゃんもどうしていいかわからないし道端で話すような事でもないだろう?」

「ああ、そうだな。お前がちゃんと話を聞いてりやこんなに疲れることもなかつたんだが」

「大丈夫。君の^{恥ずかしい妄想}言いたい事はちゃんと聞いている。理解できているかと言われたら自信がないんだけどね」

「そりや突然(実は話してたのが幽霊だつたとか)言われたら理解できねーよな。とにかく場所変えるか」

そこから黒崎くんの話に付き合う形で俺も前世の知識を披露することにした。

この世には幽霊が溢れていて、幽霊の事件は靈界探偵という存在が解決したりすることや靈界の他に魔界なんかもあつて強大な勢力が霸權を争つていてのこと、外国の秘境にはパツチ族という民族が代々偉大なる大精霊グレートスピリットを守つていることなどだ。

どうやら黒崎くんの琴線に触れたことがあったのか「幽霊に追いかけられるんだがなんとかならないか?」と聞いてきた。

ちなみになんと答えたのかといふと「すべては偉大なる大精霊グレートスピリットの導きによつて決められる。君が幽霊に追いかけられるということは、近いうちに黒崎くんは靈と戦いに巻き込まれる可能性が高いね。今のうちに魂の力を使えるようになつておかないと苦労するよ」だ。

まあシャーマンファイトなんてあるわけないんだが。

その日はそんな話をして別れ、帰り道でたまに会うお姉さんと話してから帰つた。

このお姉さんはよく怪我する人みたいでいつも頭から血が出てる。病院を勧めても大丈夫としか言わないし困つたもんだ。ちなみに連絡先を聞いても教えてくれなかつた。

しばらくして黒崎くんに会つたんだが、なぜかお札を言われた。

なんでも死神と会つて戦う力を手に入れたんだそうだ。そして今は死神代行として戦うことにしてたらしい。戦う時に以前聞いていたいろんな技や戦い方が参考になつたんだつて。

俺は内心かなり焦つた。黒崎くんはいよいよトリップしてしまつたようだ。俺のせいで黒崎くんはますます現実逃避し始めてしまつたんだから。

いや、いい方に考えろ俺! 黒崎くんは自分なりのファンタジー小説を作ろうとしているのかもしれない。もしくは漫画家。

将来彼が考へたキャラクターたちがゲームになつてるかもしれない。

彼は悪霊にホロウという名前を付けてた。なるほど、h o l l o w か。可愛さも含みながら敵役の名前にするならいい感じだな。ネー

ミングセンスは良さそうだ。

しかし死神の力つてのは少しばかり中二っぽくないか？いやこのくらいの年齢ならまだ闇とか大好きな年齢か。死神の代行つていうのはよくわからない設定だが、序盤は代行として成長していく死神になるとかそんな感じなのか？

「いいかい黒崎くん。敵との戦いは常に初見だ。そして敵は毎回違う力を持つている。そんな相手に簡単に勝てるなんてことはありえない。だから負けそうになつて膝を折つてしまいそうな状況になつても、決して諦めずに自分の魂に問い合わせるんだ。そして内なる自分に打ち勝つた時、秘められた力を開放して勝つんだ」

「ああ、わかつて。今の俺はまだ戦う力を手に入れたに過ぎねえ。だが、俺がみんなもこの町も護りきつてやるさ」

「その意気だよ黒崎くん。（主人公に自分を投影しているのはどうかと思うが）君が諦めなければきっと守れるさ。ただ（主人公の俺ツエーーはあんまり好きじゃないから）仲間の存在を忘れてはいけないよ。仲間とは共に戦う者であつて君が守る者ではないんだからね。信頼し背中を預けるつてのは君にとつても仲間にとつても大事なことさ」

「…そつか、そうだよな。確かに仲間ルキアたちを信じるつてのは大事だな。あらがとよ。俺はいつの間にか1人で全部護ろうとしてた」

「それは仕方ないことなんだよ。（キヤラは複数動かすより主人公だけのほうが楽だからね）でも1人で全部を守れるなんて不可能だ。（設定を考えるのは）難しいかもしけないけどぜひ頑張つてほしい」「そうだな。確かに（仲間にも傷ついてほしくないなんて）難しい事かもしれないけど俺1人で全部なんて不可能だもんな。ちゃんと（仲間と戦うつて事を）考えてみるわ」

「急ぐ必要なんてないさ。時間をかけてもいいから（設定を）考えてみるといいよ」

どうやら黒崎くんは日本刀で戦う設定にしているようなので、参考にと某流浪人の漫画の技なんかを教えてあげた。

いざれは地球上のみんなから元気をもらつて最後の一太刀とかも

教えてあげよう。

たぶん今は近接戦闘メインで戦う設定なんだろうけど、絶対に中盤くらいからは能力ものとか靈力の強さが一と/orになるはずだ。

どうしても次から次へと強い敵を出そうと思つたら腕力だけじゃ無理だしね。死神設定なんだから○○を司るとかやりそuddish。

まあこれは黒崎くんの（考えた）物語だから俺があんまり口出しそのは無粋つてやつだ。

助言を請われた時にだけアドバイスしてればいいや。

後日また黒崎くんに会つた。なんでもちやんと仲間を信頼して一緒に戦うことにしてらしい。

「そつか、そのほうがいいよ。（戦隊モノとかもそうだけど）5人くらいは必要だと思つてたんだ」

「ああ、（俺、ルキア、チャド、井上、石田、こうなることがわかつてたのか…）あんまり巻き込みたくなかったんだが、この前言われたことを考えて仲間を信じることにした」

「アドバイスが役に立つたなら嬉しいよ。んで、今日はどうしたんだい？」

「ああ、またちょっと相談なんだけどよ」

黒崎くんの相談というのは仲間の能力についてだつた。1人は右腕を変化させて戦うパワーファイターで、もう1人は怪我を治療したりするヒーラーのようだ。

なんでもこの後死神の世界に連れ去られた仲間を助けに行くことになつて、自分含めパワーアップが必要になつたらしい。

奪われた仲間を助けに行く展開か。

うん、やはり黒崎くんは王道的中二だつたようだ。

修行回ならば四大行とか教えてもいいか？いや、焦るな俺。もし黒崎くんが俺のアドバイスをそのまま取り入れていたら物語の繫がりとかおかしくならないか？

確か靈力を使う死神設定だつたのに念とか出てきたらおかしいよ

な。

まあそのへんは追々教えてやるか。

「そうだね。話を聞いた感じだと2人とも力に目覚めてまだ間もない（設定）だろう？まずは基礎能力を高めていくほうがいいんじゃないかな？」

「やつぱりそうだよな。いつもみたいに（ぶつ飛んだ）意見とか発想とかないのか？」

「うーん、靈力つてさ。イメージなんだよね（たぶん）。発想力とも言える。そしてそのイメージした通りの形を思い通りに操ることができたら、それだけで戦いの中で選択肢は広がると思うんだ。パワー・ファイターの子なら大砲にするとか、腕 자체を大きな剣や槌にするとか、鞭にして変則的に戦うのもありだね。ヒーラーの子なら戦うよりもまず自分が攻撃を食らわない事が大前提じゃないかな？（黒崎くんが考えた設定がわからないから）詳しく教えてもらつたりすればまた違う意見も出るかもしねりないけどね」

「いや、こうやつて色々（靈力や戦い方の）話を聞いてもらつてるだけで十分だ。」

「そうかい？（他の人に話したらイタイ子扱いだらうから）俺でよかつたら話を聞くくらいいつでも構わないよ」

そこからしばらく黒崎くんに出会わなかつた。学校も休んでるみたいだ。

おそらく執筆活動に集中しているんだろう。でも欠席は良くないぞ。

なぜか今まで会つていた由美ちゃんや他の人たちも会わなかつたんだが、由美ちゃんはちゃんと学校に通えるようになつたのか心配である。

そんな事を考えてたら黒崎くんがやつてきた。元々彼にはいつも仲の良い友だちがいるから俺から話しかけることは少ない。いや俺は俺でちゃんと友だちがいるぞ。

俺と話す時は基本妄想物語の事だしクラスメートの前で話していい内容ではないからそんなに話すことがないだけだ。

だが彼の様子がおかしい。いつもみたいに妄想を話している時の雰囲気ではなく氣落ちしているような…表面上は隠してるつもりだろうが俺にはお見通しだ。

そして俺には黒崎くんが落ち込んでいる理由だつてちゃんと理解している。

そう、スランプだ！

いやあこればっかりは仕方ない事なんだよな。どれだけ妄想力が高くて必ずぶち当たる壁だ。

ここでその壁スランプをぶち破れるかどうかで彼の今後が変わるだろう。こちらに気づいていないようだし、たまには俺のほうから声をかけてみるか。

「やあ黒崎くん。随分と暗い表情をしているけど何かあったのかい？」

「ああ、ちょっとな。いや、お前ならいいか。この後時間あるか？」

「もちろんだよ。その空元氣というか氣落ちしてるのを隠してますみたいな態度の理由も気になるしね」

「気づかれてたのかよ…他のみんなも気づいてたのか？」

「さてね。気づいている人も何人かいそuddo、俺はすぐにわかつたよ」

放課後の教室で黒崎くんと2人だけで話を聞く。クラスメートの井上さん（だつけ？）などは心配そうに待とうとしていたが黒崎くんが大丈夫だからと帰らせていた。

まあ今からする話は誰にも聞かせたくないだろう。下手するとゴミを見るような目で見られかねない。

黒崎くんから話を聞き、要約すると俺（主人公）が敵と戦いボスに対する自分の持つ力を全て使つて倒した。それによつて黒崎くん（主人公）は今まで使えた靈力を使えなくなつた。自分で戦う事ができ

なくなり仲間に任せっぱなしなつてているのが悔しい。ということだつた。

なんだ、スランプかと思つたらめっちゃ脳内物語進んでるじゃん。この展開で考えられるのは2パターンある。主人公交代パターンか、主人公の力復活パターンだ。

つまり今は主人公が力を取り戻すまでの仲間パートなのだ。
だけど黒崎くんは自分が主人公になりきつてから展開が思いつかないのだろう。

「黒崎くん、君の話はよくわかった。だけど諦めちゃいけない。そして焦つてもいけない。これは次(の展開)のために必要な時間なんだ。黒崎くん自身が前に出たいつて気持ちは大事だけど、今は一緒に戦う仲間たちがこの後も一緒に戦っていくための時間だと思うんだ。」

「なんだよそりや？藍染よりも強い敵が現れるつていうのか？」

「そうだね。（愛染？愛染明王か？死神設定だから敵は仏とかそういう感じなのかな？）俺は愛染で終わりだとは思わない。（仏教的な意味で）」

「そつか、なんでそう思うのかはわかんねーけど、今までお前のアドバイスは役に立つてるしそうなのかもしねえな」

「そしてもう1つアドバイスだ。こういう状況の時は焦れながらもその時を待つんだ。そうすれば仲間や今まで戦ってきた好敵手たちが力をくれるもんさ」

感情移入も大事だが主人公になりきつてしまつては良い物語など浮かばないだろうに。

いや、黒崎くんの事だからそういう妄想をしたほうが思いついたらするのかもしれないな。

主人公が復活した後の敵なんかについて考えているのかもしれない、気落ちしていた表情から考える表情になつた黒崎くんと学校を離れ、雑談しながら帰つていつた。

後日また黒崎くんから話をきいた。

なんでも新しい力に目覚めたんだけど、その力を奪われてしまい最後には敵対したり共に戦った死神たちの協力を得て力を取り戻したらしい。

うんうん、悩んだ甲斐があつたね黒崎くん。

仲間たちもしつかり成長し一緒に戦っていたみたいだし、スランプを乗り越えられて良かつた良かつた。

「色々と焦つたりもしたけどさ。お前と話してたら仲間たちと協力する事とか、やっぱ大事だったんだなって改めて思えたわ」

「それならよかつたよ。無事に壁^{スランプ}を乗り越えられたようだしね。でも大事なのはこの後だと思うんだ。聞いてる話でいくと、この後に集大成とも言える敵が出てくると思うんだよね。今まで培ってきた絆や黒崎くんが持つ力、それに今まで戦ってきたライバルたちの力を全部使つても勝てないかも知れないと思わせるような敵がね」

「それが前に言つた藍染よりも強い敵つてやつか。今までそりだつたけど、お前には未来が見えてるのか？」

「(妄想物語の) 未来か：それは俺にはわからないけど、きっと黒崎くんならやつてくれる信じてるよ」

「そつか、俺も誰がきてもみんなを護つてみせるさ」
「あはは、信じてるよ。君ならば必ず(この妄想を)
卒業^{終わらせて}くれるつて」

「ああ！任せとけ！」

今までずっと黒崎くんの妄想を聞いていて、起承転結で言えば今は「転」の段階だ。

主人公が死神の力を得て戦い始めて、その力を失つて仲間パートも出てきたし、次は最後に仲間やライバルたちと共に闘してラスボスを倒して終幕だ。

長かつたような短かつたような気がする黒崎くんの妄想物語だけど、ここまできたら最後まで見届けたい気持ちもある。

そして将来大人になつた彼にこの物語を聞かせてあげて悶え苦しむ様子をニヤニヤと見てみたい。

ここまで付き合つたんだからそれくらい許されるだろう？

今のうちに設定集とか作つてもらつておくか。でもそんなの保管してたら俺がイタイやつだよな。

高校生活も今年が最後なんだ。黒崎くんよ、ぜひともこの壮大な妄想に決着をつけてくれ。

彼の妄想力を侮つていたよ…

最初は死神とか仏とか日本が舞台なのかと思つてたのに途中からやけに西洋名になるなと思つてたんだ。

ホロウなんかは可愛げのある名前だなくらいだつたけど、アランカル（？）とかクインシー（？）とかどつから出てきたんだ？つて名前がすらすら出てきてた。

おかしいだろ！愛染明王が最初のボスだつたんだから次に出てくるのは菩薩とかそんな感じにならないと繋がらなくね？！

：いや、そうじやない。これはきっと俺の考え方が固まつてしまつてるのが問題なんだ。

死神が主人公だからと言つて神仏を敵にするのが浅いってことなのか！

確かに地球人だと思つてたらサイヤ人だつたりナメツク星人だつたりしてたもんな。

ハオ様だつて今の俺を見たらきつと「ちつちええな」つて言うよな。オーケー大丈夫だ。さあ黒崎くん続きを聞かせてくれ。

え？ラスボスは未来を改変する力？…まあいいけど風呂敷広げすぎて大丈夫？

死神の力にホロウの力とクインシーの力を合わせて戦つた？まあ単純に力が増大したよりも説得力はある…か？

かつて倒した愛染も共に戦つた？なるほどボスも仲間になるパ

ターンのやつね。

それでも苦戦していたけど、最後は能力を無効化させるアイテムを使つて倒したつてことね。

あれか、ひかりのたまみたいなやつか。闇を払うみたいな。

「（脳内では）随分と激戦だつたみたいだね。でもまあ最後は（妄想物語を）終わらせることがてきて良かつたよ」

「ああ、まさか本当に藍染よりも強いやつが出てくるなんて思わなかつたな：俺一人だけだつたら絶対に勝てなかつた。正直もう1回戦つたら今度は勝てないかもしねーな。それくらいの相手だつた」「うん、（主人公）1人では勝てないだろうね。（俺ツエリー好きな）黒崎くんとしては単独撃破したかつたんだろうけど、それじやあダメなんだよ。ああでも、もし次（作）があるなら無双するのも面白いかもしけないね」

「…なるほどな。次（現世や尸魂界を脅かす）敵が現れるようなら俺1人で倒せるくらいに強くなればいいんだよな」

「そうそう、君の物語^{妄想}はまだこれからだろう？俺ができるのはアドバイスだけなんだけど、黒崎くんには期待してるよ」

「ああ、俺が護つてやるさ！」

次に黒崎くんの物語^{妄想}を聞かせてもらうのが楽しみだ。

がんばれルキアちゃん

一護のやつが変わった。

私、朽木ルキアにとつて黒崎一護はたまたま助けた人間でしかなかつた。

だがその時に不甲斐なくも力をすべて奪われてしまい、死神としての活動ができなくなってしまった。

緊急の措置としてしばらくの間一護に死神の代行として活動してもらうことにしたのだが：

最初は見慣れない虚相手に戸惑っていた。

いきなり戦うことになつた平和な国の若者が見知らぬ怪物相手にして怯まないはずがない。

当然の事だし、私の力が戻るまでの事だからと見守つていたのだ。あれはいつだつたか、死神代行として活動してしばらくした頃に一護から不思議な事を聞かれた。

「なあルキア、あの世には幽霊がいっぱいいるんだろ？ 霊界探偵つてのがいるつて聞いたんだが、そいつつてどこ行つたら会えるんだ？」
「は？ 霊界探偵だと？ 私は今のところ聞いた事も会つた事もないな。護廷の隊長たちなら何か知つているのかもしけんが、末端の私では聞いた事のない存在だ」

「そつか、靈丸つてやつを教えてもらいたかつたんだが、自分でやつてみるつきやねーな」

何やら一護と同じく靈を見る事のできる知人から教えてもらつたらしいが、靈界には事件を解決する探偵なんかもいるらしい。

まさか死神である私が現世の青年に教えてもらうとは！ 枯木ルキア一生の不覚！

私とて朽木家に属するまでは真央靈術院に通つていたというのに、まさかそんな存在がいたことすら気づかなかつた。

いや、今まで聞いたことがなく現世だからこそ知ることができたと

思えば、もしかしたら表の組織ではないかも知れないな。

一護の様子を見るに、騙しているとかそんな雰囲気は感じられない。

ということは、その靈を見ることのできる知人が以前にその靈界探偵という者に助けられたのだろう。

私も会つてみたいが靈の事件が起きる時に現れるらしい。

虚なんかは現世滯在中の死神が解決するから、おそらく虚の関係しない事件の解決を担当しているのだろう。

そしてその日から一護の修行が変わった。

靈力を指先に集める練習をしていたり、斬魄刀ではなぜか抜刀術をよく練習していた。

目指すところは人間に9つある急所を同時に攻撃できるようになることらしい。

「九頭龍閃」という名前らしいんだが、それもその知人に教えてもらつた技のようだ。

その知人は何者なのだろうか？

斬拳走鬼は知らないようだが、何か別の戦い方を知っているような感じがする。

現世の人間ならば剣術は知つてもおかしくないが、靈力を操つたり集めたりなどは知らないものだ。

しかも遠い外国の秘境には偉大なる大精靈なる存在がいることも教えられたらしい。

そして今のうちに靈力を扱つた戦い方を学んでおかないとこれから戦いを乗り越えることはできないと言われたそうだ。

確かに今の一護では弱い虚相手ならともかく、大虚なんて出てきてしまえば勝てないだろう。

一護の他に茶渡、井上、石田と共に戦う仲間が増えていき、お互いに切磋琢磨しながら腕を上げていった。

どうやら一護は知人から助言をもらっているようで、自分の中の魂に語りかけ打ち勝てと言わされたのだと。本当によく知っている。

自身の分身でもある斬魄刀に語りかけ屈服させることこそ死神の力を上げる方法だ。

それをわかつていて、具体的ではなく抽象的に語ることで考えることを促す。

これで一護がまた少し賢くなってくれれば知人の目的は達成されるのだろう。

どうやら一護たちの成長を見れるのはここまでのことだ。

「魂界から迎えが来ることはわかつていたが、まさか兄様まで来るとは……」

すまない一護、ここでお別れのようだ。

あの方わけものめ、何が「生きたいって言え!!」だ。

死神なんだからとつぶに死んでおるわ。

というか一護よ。お前、月牙天衝という名前はどうした？

「月牙天衝…魔王半月剣！」って何が変わったのかよくわからんぞ。え？ 出した衝撃が三日月から半月になれば力も強くなるのか？ でもそれだと満月になつたら丸い衝撃波が飛んで行かないか？ 本当は月の力を蓄える剣があるけど持つてないから再現したと？ この前まで使つてた抜刀術はどうしたのだ。

一護の考える事は私には難しすぎる。

共に戦う仲間たちですら理解できているのか怪しいものだ。だがおかげで魂魄すらも消滅するという事態は逃れられたので良しとしよう。

藍染惣右介が黒幕だと判明し、虚圏に逃げられはしたが挽回のチャансは残つた。

一護たちは現世へと帰るらしいが、その前に戦つていた者たちは「あの剣術はなんだ?」と質問していた。

そして帰るまでの少しの時間で死神たちに「飛天御剣流」という剣術を説明して帰つていった。

待て一護よ!あとはルキアに教えてあるじゃないわ!この馬鹿者!

私は別に教えてもらつておらん!ええい、私は知らんのだ!

あれ卯ノ花隊長?いえ私は本当に何も知らないのです!

更木隊長がやられた技?飛び上がって打ち下ろして…

ああ、それはおそらく龍翔閃からの龍槌閃でその後に龍巻閃、最後に龍巣閃ではないでしょうか?いえ、私は本当に使えないのです!

井上が拐われたと聞き虚圏に向かい、今は亡き海燕殿に扮した破面も倒すことができ、一護も現世へと向かつた。
後は藍染を倒してくれるのを信じるだけだ。

しかし一護が知人から教えてもらつたという
「永遠を搖蕩い舞い散る魂」というのはすごい威力だ。

私の袖白雪とも相性が良く、とても満足のゆく結果が出た。

問題は後述詠唱だけだ。なぜ後から「相手は死ぬ」って言わねばならんのだ?

どうやら一護は無事に藍染を倒し、封印することができたようだ。
そして一護たちもお咎めなしどなつた。よかつた。

一護はその力を全て使い果たし、もう死神として戦う事はできない
という。

それでいい。現世で生きているのだからこれからは人間として暮らしてほしい。

だが最後に浦原に奇妙な事を言われた。

「朽木ルキアさん、あなた黒崎サンに何を教えていたんスか？」
「ん？なんのことだ？」

「黒崎サンが藍染惣右介に言つてたつすよ。これを見てください」
そこには一護と藍染の最後の戦いが映っていた。

どうやら浦原は一護が勝てばいいが、負けた場合に藍染の対策を練るためには黒い靈圧を吹き出し藍染と対して一護がいた。

ふう、どうやら俺もついにこれができるようになつたらしいな
ほう？ただの靈圧にしか見えないが、それで私を楽しませてくれる
のかい？

ああ、その溢れ出る黒い靈圧ですべてを焼き払うという…：邪王炎殺

剣

私にはただの靈圧にしか見えないがね。まあいい。その邪王炎殺
剣とやらの力でこの私を倒してみせるがいい

ならば始める前に言つておく。己の力に溺れる者は、より大きな力
の持ち主の前には必ず敗れ、己が不明を悔いるはめとなる。人それを
…必滅という！

この私が敗れると言いたいのかい？面白い言葉だ。誰の言葉だい
？

てめえに教えてやる名前はねえ！

そこからは映らないほどの速度で戦つているのであろう光景が
映つていた。そして場面は最後の一護のすべてを賭けた最後の一撃
になる。

邪眼の力を舐めるなよおおおお!!!!!!

ふむ、一護に邪眼などあつただろうか？その前にあんな口上述べる
男だったか？藍染に最後の一撃を加える場面を見ながら私はそんな

ことを考えていた。

「今見て頂いたのが最後の戦いの場面つス。邪王炎殺剣てのが何かわかりませんが、黒崎サンはこれを教えてもらつたと言つてました。黒崎サンに戦いを教えたのはあなたしかないので、どういった技のか聞きたかったんでス」

「いや、これは私ではない。一護の現世の知人が戦い方に詳しいらしくいろいろと助言をもらつていたようだ」

「ふむふむ、ならばいづれ現世でお会いすることもあるでしょう。それでは」

どうやら浦原はそれだけ聞いたかったようだつた。

これで平和になつた尸魂界だが、知らないところで違う問題が発生していたのだ。

今、尸魂界では飛天御剣流や邪王炎殺剣を自分たちも使いたいとう動きがあるのだ。

そして護廷十三隊の十二番隊が一護に興味を持つている。
どうやら一護にある邪眼がその力の源として藍染を超える力を出したと考えているようだ。

邪王炎殺剣も邪眼の持つ力によつて出されたものではないかとかなんとか。

あの方わけものめ、ちゃんと責任とるのだぞ…

そこからわけのわからん技の研究をしている以外は平和だつた尸魂界に浦原がやつてきた。

聞けば一護の力を取り戻すために協力してほしいとの事だつた。
迷う必要などなく刀に靈力を込める。それを一護に託す役目を私は仰せつかつた。

現世時間でなら久しぶりに会つた一護は一皮むけたような感じだな。

何やら敵の策略で親しいものたちをも奪われたようだが、私が来るのを待っていたかのようだつた。

「久しぶりだなルキア。来てくれるのを待ってたぜ！」

「うん？一護よ。お前は私がここに来る事がわかつていたのか？」

「ああ、焦るかもしけないが待てつてアドバイスもらつてよ！待つていれば必ず仲間が力をくれるつて信じていればこれくらいなんともねえ！」

あんなに最初は焦つたり驚いたり忙しかつた一護が成長したものだ：

これが人間の持つ成長の力というものか。つい物思いに耽つてしまつた。

一護は力を取り戻し、初代死神代行の事件は幕を閉じた。

ほう？月牙天衝斬撃を飛ばしてから瞬歩で追いついて更に月牙天衝斬撃を重ねることで破壊力が何倍にもなる「月牙ストラッショクロス」だと？

まさしく一護のために考えられたかのような技だな。

というか、それ相手粉々にならないか？

後から聞いてみれば、知人からどうやらこうなる事がわかつていて、今は壁にぶち当たつているから乗り越えろつて激励と一緒に教えられたらしい。

ふふ、良い知人を持っていて羨ましい限りだ。

だが、どうやらそんな良いアドバイスばかりでもないらしい。

曰く、次は総力を結集して挑まねば勝てない敵が現れるとの事。まるでこれから起こと確信しているかのような様子だ。

直接その知人に話を聞きたいと頼んだ事があるのだが、一護は「あいつは俺に任せると、信じてると言つてた。だったらそれに応えて全部護つてやるだけだ」と、どうやら巻き込まないようにしているようだ。

ならば私も死神として守れるように腕を磨こうではないか。

始まりは突然だった。まさか滅却師が生き残つていて襲つて来るのは：

最初こそ不覚を取つてしまい手傷を負つてしまつたが、正解が使えないのならば他の戦い方をすればよいというだけだ。

私の正解は自身を絶対零度にし、周囲をもすべて凍らせることができる。

しかし一護から聞いたところによれば「本当に凍るとは、時すらも止めてしまうもの。そして凍つた時の中で敵を碎くものこそ、真に凍らせる者」という事らしい。

私もまだまだ正解程度で満足するわけにはいかない！

護廷十三隊も隊長含め入れ替わり等で人が変わつたが無事乗り切れた。

最後の最後まで一護に頼ることになつてしまつたのが悔しいな。
しかし大したやつだ。最後の戦い、私は見送るしかできなかつたが、共に戦つっていた者たちには何か響くものがあつたのだろう。

どんな夜にも必ず终わりは来る。闇が解け、朝が世界に満ちるもの。人それを：黎明という！

だから尸魂界で今こんな口上を述べてから剣を合わせるのが流行だなんて何かの間違いだと思いたい：

馬鹿者！誰だそんな事言つたやつは！え？一護がユーハバツハとの戦いの最後に言つてた？

本当に責任取れよあのたわけものめ！

突き抜ける織姫ちゃん

あたしには気になる男の子がいます。

オレンジの髪をした活発な男の子。名前は黒崎一護くん。

引っ込み思案な私にはその明るさが眩しく思えて（髪の色の事じやないよ！）いつかは仲良くなれるといいな、なんて思つてました。

そこからは徐々に仲良くなれて、普通にお話したりするようになれたのは嬉しいな。

そんな彼が変わったんです。見た目じやなくて空氣というか、雰囲気みたいなものが。

その時は変わった様子を見ても聞くことはできなかつたんだけど、それを知ることになるのに時間はかかりませんでした。

そして黒崎くんの事を知る機会とあたしが力に目覚める機会は一緒にやつてきました。

きつかけは虚となつてしまつた兄に襲われた時でした。

最後にはお兄ちゃんとともお別れすることになつちやつて悲しかつたけど、この力であたしがみんなを守れるようにがんばる事にしました。

だから安心して見ててね、お兄ちゃん！

ちやんと自分の力を使えるようになったのは、たつきちゃんを助ける時でした。

そこから茶渡くんと一緒に浦原さんから死神や虚というものを知らされて、茶渡くんと一緒に夜一さんに相手をしてもらい特訓したりしていました。

でも夜一さんはとつても強いんです。黒崎くんのように刀を使うわけではなく、素手で戦うのが得意なんだと言つていました。

しかもとつても素早く、本気を出されると見えないので手加減してくれば敵わないくらいでした。

でもこのまま続けていてもこれじゃダメだと思ったのか、夜一さんは目の前で動かずにただ構えるだけの姿勢になっていました。

手を斜め上と斜め下に広げた姿勢で待ち構えている夜一さん。なにがあるのかと警戒していると、夜一さんから声をかけられました。「ふむ、このまま特訓してやつてもよいが、少し儂の遊びに付き合つてもらおう」

「遊び…ですか？」

「うむ。一護からな、この構えから3つの動作を同時にを行うという返しの奥義を教えてもらつたのじや。力よりもスピードが不可欠らしくて、儂ならできるかと問われたのでせつからくだからお前たちで試すこととした」

「黒崎くんから…」

「なんでも、名を「天地魔闘の構え」というらしいんじやが、武器を持たず徒手でしか使えないらしくてな。聞いてみれば儂にピツタリではないか」

本来は持ち前のスピードを生かして相手をかき回すらしいんだけど、当然相手だつてそんなことはわかっているだろうから、何か対策はないかと考えていたらしいんです。

そこに黒崎くんが「こういう奥義を聞いたんだけど、オレじや戦い方が違いすぎて使えねえし、もしかしたら夜一さん使えるんじやないか？」ということでした。

ちなみにこの奥義の解号（？）は「天よ叫べ！地よ唸れ！さあ刮目せよ！」らしいです。

夜一さんがどんな相手を想定しているのかわからぬけど、見えないくらい早い夜一さんでも更に先を目指してゐるなんて、あたしの先はまだまだ長そうです。

というか、黒崎くんはどこでそんな奥義なんて聞いてきたんだろう

?

夜一さんが知らないくらいだから浦原さんだつて知らないだろうし、やっぱり朽木さんなのかな…：

あたしはまだ黒崎くんの隣で一緒に戦うところまで辿り着けていないから、奥義なんてすごいものを教えることのできる朽木さんがちよつぴり羨ましいです。

朽木さんが拐われてしましました。：正確に言うなら連れ戻されたのかな。

黒崎くんは戸^ト魂界つていうところに乗り込んで助けるつて言つてるので、まだ非力なあたしだけど頑張つて一緒に朽木さんを助けたいと思います。

でも、連れ去られた朽木さんお姫様^{おひめさま}を助けに行くなんて、思つちゃダメなんだろうけどちよつと羨ましいと思つちゃう自分もいます。

浦原さんから今のはまじやダメだつて言われちゃつたのでとにかくもつと強くならないとね！

そこからたまにですが、黒崎くんが独り言を呟くようになりました。

聞いてみても「いや、大丈夫だ。これはオレが考へないといけないことだから」と具体的な事は教えてくれませんでした。

親友のたつきちゃんにも相談したんだけど、返ってきた答えは「見守つてあげなさい」とか「そのうち元に戻るよ」とかでした。

朽木さんじやないから頼りないかもしれないけどあたしにも相談とかしてくれないかなあ。

黒崎くんが剣の特訓をしています。

「月を見るたび思い出せ！」：いや『オレがこの^{抜刀術}技を使う以上、お前の死は絶対だ…！』のほうがいいか：」

あれは何をしてるところなんだろう？

「黒崎くん、今は何をしているの？」

「ああ、井上か。今のは（自分を）高めるための言葉だな。戦う前にこれがあるのとないのとじゃ大違いだしな」

「なるほど！（自分の力を）高めるための言葉だつたんだね。そういうば私も（刀の力を開放する解号だつけ？）聞いたことがあるよ」

「それだな。なかなか（自分のテンションを）高める言葉に行き着かなくてな。ちょっと（あいつに教えてもらつた言葉を）考えてた」

「そつか。（解号を考えるのつて）結構難しいんだね。早く（斬魄刀の力を）開放できるようになるといいね」

「だな！（カツコイイ決めセリフを言つて）ルキアを助けるためにも精進あるのみだ！」

黒崎くんは自分の刀を日本刀の形で使う時と、大きな刀にして使う時とで戦い方を変えているみたいです。

日本刀の時は拔刀術？っていう鞘から抜き放つ戦い方をよくしています。

これも教えてもらつたんですが、この戦い方は拔刀斎つて人の戦い方らしいです。

抜刀術を極めた事で大勢の敵が相手でも1人で打ち破る事ができるすごい人なんだつて。

あたしも負けないように、隣で一緒に戦えるようにがんばらないと！

なんと！黒崎くんからあたしの戦い方についてもアドバイスをもらいました。

なんでも、いつも黒崎くんにアドバイスをしてくれる人みたいで、

自分で考えつかないような技や特訓などを教えてもらっているそうです。

そつか、アドバイスもらつてるのは朽木さんじやなかつたんだ：それを聞いたあたしはちょっとだけ安心しちゃいました。

でもそうなると一体誰なんだろう？ 黒崎くんに戦い方や技を教えられる人つて他にいたかな？

余計な心配をしている間に話は続き、そんなアドバイスをくれる知人さんにあたしの戦い方のアドバイスももらつてくれたらしいんです！

その知人さんが言うには「事象を拒絶できるんだつたら最後は虚構だね、現実を虚構にする事ができればすべてをなかつたことにできるんだよ」との事らしいです。

現実を虚構つてどうすればいいんだろう？ でもあたしの力はそれに近いかもと言つていたので努力あるのみよ！ がんばれあたし！

尸魂界では瀰霧廷に突入するときに黒崎くんとはぐれてしまい、石田くんと一緒に行動していました。

そこから剣八さんややちるちゃんと一緒に行動して、石田くんや茶渡くんを助けたりもしました。

最後は藍染さんっていう死神さんたちが裏切つて朽木さんから何かを取り出していました。

大怪我していた黒崎くんを治療して治すことはできたけど、やっぱりまだあたしにできるのは「拒絶」までです。

どうやつたら「現実を虚構にする」ことができるんだろう…

あしたたちが瀧靈廷に乗り込んだことは藍染さんたちのおかげ（？）で不問となりました。

帰る前に黒崎くんは赤い髪の大きな男の人たちから「あの技や戦い方はどういうものなのかな？」と聞かれていました。

どうやらこの尸魂界というところでも見たことのない剣術のようです。

そんな技や戦い方を知っている黒崎くんを見るとあたしまで嬉しくなつてきちゃうな。

でも、黒崎くんは面倒になつたのか「後は全部ルキアが知ってるからルキアに聞いてくれ！」と言つて帰ろうとしました。

やつぱり朽木さんとは名前で呼び合つてゐるし、戦い方も同じ刀を使うから通じるものがあるのかな…

あの「飛天御剣流」ってあたしにも使えないかな？

あ、朽木さんが綺麗な女人に詳しく述べてゐる。笑顔なのになんか怖い…

朽木さんは知らないって言つてるけど、あたし知つてるんだよ。

黒崎くんから朽木さんもいろいろとアドバイスもらつてゐるのを…

黒崎くんは知人さんから教えてもらつた事ばっかりだつて言つてるけど、朽木さんじやなくて浦原さんたちでもなかつたらもう誰も思いつかない。

もしかしたら黒崎くんはすごい家柄で、実は代々剣術や武術を磨いてきたやんごとない身分なのかもしれない。

それに剣術の技とかだけじゃなくてあたしや夜一さんにもアドバイスできるくらい色んな事を知つてゐるんだから、知識だつて長生きしてゐる死神さんたちよりあるのかも！

そんなすごい黒崎くんの隣つて実はすつゞく遠いんじやないかな

⋮

現世に戻ってきてしばらくして、破面っていう人たちが襲つてきました。

おつきい人からの攻撃は避けることができたのですが、避けられた事によつて怒り出したのかすごい攻撃の嵐に襲われてしましました。なんとか茶渡くんが耐えていてくれたのですが、耐えきれず負傷してしまい、気を取られたあたしも同じく怪我をさせられてしましました。

すぐに治療して命に別状はなかつたのですが、その結果浦原さんから戦いに向いてないと言われちゃいました：

でもまだあたしは諦めないもん！

ずっと目標にしてきた「虚構」の手応えはちょっとだけあるんだから、きっとあたしも力になれるはず！

朽木さんから一緒に特訓しないかと誘われたので渡りに船と二つ返事で了承しました。

あたしには使える武器もないし、盾舜六花での戦い方がメインだけど「能力は使い方次第」だつて言つてたしまだまだこれからだもんね。そしていつも通り特訓が終わつて送つてもらつてたんだけど、そこで敵に襲われてしまいました。

送つてくれていた死神さんを人質にされ、虚闇というところに一緒に来いとの事でした。

あたしは一緒に行くという選択肢しかなかつたのですが、ここで破面の人から「1人だけ別れを告げさせてやる」との言葉を聞いて閃いたんです。

そう！今度はあたしが囚われのお姫様ポジションだということに！

前に連れ去られた朽木さんをちょっと羨ましいって思つてたのを神様が見てて「今度は織姫の番だよ」って言つてくれてるのかも知れないです。

ありがとう神様！

あたしは現世で黒崎くんの元へ向かい、眠る彼の怪我を治療して別れを告げます。

「ふふ、今度はあたしがお姫様だからね。ちゃんと迎えに来てね」

ちゃんとあたしがいたことをわかつてもらう為に髪の毛を数本落としておいて、ついでによく使つていた香水も振りかけておきます。これであたしがここにいて、連れ去られたことはすぐにわかるでしょう。

ちゃんと証拠を残した後に破面の彼、ウルキオラくんと一緒に虚圈に向かいました。

藍染さんにご挨拶して、力が見たいというのでグリムジョーさんを治していきます。

なんか小さな女の子がいじめできましたが、確かに囚われのお姫様が元気いっぱいだつたらおかしいもんね！

ちよつとくらい弱つてるほうが再会した時にムードが出るつて、この子たちよく知つてるね！

あれ？グリムジョーさん？え、治療のお礼に助けてくれるの？
でもあたし黒崎_{王 子 様}くんを待たなきやいけないんだけど：

えつ、黒崎くんのところに連れて行つてくるんだ。

ちよつと思つてたシチュエーションと違うけど、あんまり待たせるのも悪いから行つたほうがいいよね？

グリムジョーさんは黒崎くんと万全で戦いたいからあたしに治療させたかつたみたいです。

あたしはちゃんと助けに来てくれた黒崎_{王 子 様}くんの戦いを見守り、その

後も戦いは続きましたが黒崎くんは変身してウルキオラくんを打ち倒しました。

「黒崎くん…その、大丈夫？」

「ああ、どうやらオレの中に封印されていた魂^虚が暴れだしたらしい。あいつから聞いてはいたがまさかこれの事とはな…」

「どういうこと？ 黒崎くんは全部わかつてたの？」

「ああ、何が起こったのかは覚えてねえし、オレも前に聞いただけの話だつたんだがな。コレは左腕とか片目とかによく封印されてるらしい。いや、オレの場合はいるのも知つてたし魂に封じられていたみたいだが、時々暴れて封印を解こうとしたり、宿主^{オレ}が弱つてると表に出てくるらしいんだ」

黒崎くんはさつきの状態になる事がわかつてたんだ…

そんな大きな力を封印されてるなんて、あたしにもそんな力があつたらよかつたのに。

その力があるのは黒崎くんだけで、あたしや茶渡くんとかにも封印された力はないみたい。

でもどうして左腕とか片目なんだろう？ 何か理由でもあるのかな。治療が終わつた黒崎くんはすぐに現世へと向かうそうです。

藍染さんがそつちにいるから倒さないとたつきちゃんたちが危ないそうです。
藍染さん^{の魔王}を倒してお姫様救出^{ハッピーエンド}だと思つてたあたしの計画^{妄想}は崩れちゃつたけど…

ふふ、世界を救うために戦うなんて物語の勇者みたいだよね。

黒崎くんはみんなの期待を背負つて無事藍染さんを倒してくれました。

お疲れさま、黒崎くん。

全身全霊の一撃、すごかつたよ。あたしは見てないけど。でもわかるの。世界の命運を賭けた藍染さんとの死闘、きっと黒崎くん以外の誰にもできない事だよね。

浦原さんも言つてたよ。黒崎くんが邪眼の力を開放して倒したんだって。

それが黒崎くんの言つてた封印されている力なのかな？
いつかあたしにも教えてね。

そこからは黒崎くんも力が使えないから普通の高校生として暮らしていました。

あたしは黒崎くんの代わりにみんなを守れるように特訓しながら石田くんや茶渡くんとたまに現れる虚退治とかしていました。

黒崎くんは表面上は元気にいつも通りつて感じだつたんだけど、やつぱり死神の力がなくなつたからか、どこか落ち込んでいるような感じでした。

ある時、いつも通り学校が終わり黒崎くんと帰ろうかと思つていたところに、1人の男子生徒が黒崎くんに話しかけていました。

あたしはほとんど話したことないし、黒崎くんと話してるところも見たことがないと思うんだけど、黒崎くんはそんな彼に何か相談するようでした。

なんで!? 相談するならあたしがいるよ！ 落ち込んでるならあたしが慰めてあげるよ!!

できれば一緒に話を聞いてみたかったのでチラチラと様子を伺いながら待つっていたのですが、黒崎くんから「わりい井上、先に帰つてくれ」と言わされました。

どうもあたしがいたら話しくらいようだつたので大人しく家に帰

ります。

あの男の子は誰だつたんだろう？そんなに黒崎くんと仲良かつたっけ？

思い返しても話してゐるところを思い出せないから接点が見当たらないんだよね。

「黒崎くん最近変わつたね。前までは氣落ちしてたけど、今は違つて見えるよ」

「ああ、ちょっと話を聞いてもらつてな。今は焦らずに仲間を信じて待つ時なんだつてよ。それに藍染を倒して終わりつてわけでもなさうだし、何も考えずに焦るんじやなくて自分にできることを考えるようにしたんだ」

「そつか、それつてあの男の子に相談したの？」

「そうだな。あいつには色々と世話になつてるよ」

うーん、やっぱり男の子同士のほうが話しやすいのかな？
でも茶渡くんや石田くんにはそういう相談してないから、たまたまなのかな？

あたしにもいつか相談してね！

黒崎くんが力を取り戻そと、銀城さんっていう人と修行をしてい
るそうです。

あたしにも修行の際の治療をしてほしいと言つてきました。

そこから何度もお手伝いをして、気がついたらケーキ屋さんでアル
バイトをしていました。

何が起きたのかよくわからないけど、黒崎くんや浦原さんたちが活
躍したとの事でした。

朽木さんたちも助けに来てくれたようです。

黒崎くんは「仲間や好敵手ライバルたちがいてくれたから今のオレがここにいるんだ」って爽やかに笑っています。

できればその仲間の中にあたしも入りたかったけど、悔やんでいても仕方ありません。

次こそはあたしもみんなの力になれるように頑張ればいいんだから！

ユーハバツハさんとの戦いは熾烈なものでした。戦いのきっかけはネルちゃんが助けを求めてきたから。

滅却師という石田くんと同じ種族（？）の人たちが虚圈を襲撃してきたいです。

そこから滅却師たちとの戦いが始まりました。

最後は陛下と呼ばれているユーハバツハさんとの戦いです。いつもなら見守るだけだけど、あたしは今黒崎くんの隣で一緒に戦ってる！

未来の改変？ならあたしは改変された未来をなかつたことにしてあげるわ！

できるかわからぬけどね！

そう、知らないなら教えてあげる。

黒崎^{王子様}くんとあたしが一緒に戦うと「石破ラブラブ月牙天衝」っていう最終奥義を使えるんだからね！

え？ 最後はみんなの力をもらつて倒したい？ そうだよね。

じやあ、あたしは今度こそちゃんと見守つているね！

言つてくれたらいつでも最終奥義撃てるよう準備だけしておくからね！

あ、石田くんがなんか鎌をユーハバツハさんに刺したみたい。黒崎くんの声が聞こえる。

どんな夜にも必ず終わりは来る。闇が解け、朝が世界に満ちるも

の。人それを…黎明という！

それが黒崎くんの完成された解号つてやつなんだね！

無事ユーハバツハさんも倒したし、これでまた世界を救っちゃった
ね！

新属性だよ黒崎くん

黒崎くんと出会つてからいろいろと彼の妄想に付き合つてきた俺だが、今まで予想だにしていなかつた、そしてまさか現実で目の当たりにするとは思わなかつた出来事に遭遇してしまつた。

あれは黒崎くんと初めて話して、いろいろと設定のアドバイスをしてあげてから少し経つたくらいだつたかな？

いつも通りに通学途中にいろんな人たちと話したりしながら登校してたんだけど、そこに今までに会つたことのない人がいたんだ。なんていうのかな。和服というか、着物の上に羽織を着たような格好で刀まで持つてた。

アレはたぶん中身は模造刀か竹光とかなんだろうけど、よくあれで通報とかされないもんだ。

いや、考えてみたらここ日本だけど日本じゃないというか、NIP PONみたいなどころだからアリっちゃアリなのかな？

「君が黒崎一護に色々と吹き込んでいる少年だね。…ふむ、見るからに脆弱な靈圧の人間で取るに足らない存在だが、君のおかげで黒崎一護が私の想定していた成長から逸脱してきてる部分もあるようだ」「えーと、初めましてですね？俺に何かご用ですか？」

「いやなに、観察していた黒崎一護に想定外の変化が生まれているようなのでね。その原因たる君を見に来たと言つた感じかな。最初は排除しようかとも思つていたんだが、これから先、彼がどのような変化と成長を見せてくれるか楽しみになつてね。君にも^{王鍵の創造材}私の目的の基礎となつてもらうわけだし、今回は何もせず退くとしよう」

「黒崎くんの変化？俺が原因？目的？よくわからないです」

「君はそのままでいいさ。せいぜい私を退屈させないように楽しませてくれ」

その人は会話にならない会話っぽいものをしたと思つたら、勝手に満足して帰つていつたんだ。

だが俺にはそれだけのヒントがあれば正解に辿り着くなんて造作もない。

今のは俺をただの高校生だと思つて理解できないと勝手に思い込んで答えを言わなかつたんだろう。

だが！舐めてもらつちや困るぜ！こちとらおそらくあんたよりも合計人生時間は長いんだ。

そして人生経験とは蓄積された知識のことでもある！

黒崎くんと話すようになつてから、俺も学校では黒崎くんの事を背景ではなく人物として見るようになつた。

彼はよく色黒の男の子や茶髪の女の子と仲良くしているようだつた。

あと眼鏡かけた子も嫌味っぽい感じの小言みたいな事を言つてゐのを見たこともあつたな。

そして今のは言葉…そこまでヒントが散りばめられていれば答えは1つだ。

そう、黒崎くんは狙われていたんだ！

それならば今のが明確な答えを言わないのも頷ける話だ。

つまり筋書きはこうだ。
黒崎くんは昔は大人しい物静かな少年だつたんだろう。そして黒髪。

しかし大人しい子であつたが故にいじめられる事になつてしまつたんだ。
そしてそこでいじめていた相手から守つていたのが色黒の子だつたんだろうな。

大人しく控えめな黒崎くんを守つているうちに、色黒の子も段々と黒崎くんの事が気になつていつたんだろう。

もしかしたら着物の人もその頃から黒崎くんと知り合いなのかも
しない。

そしてそんな黒崎くんを守つているうちに、庇護欲から段々と独占
欲に変わつていつたんだ。

だがきっと黒崎くんはそんな事に一切気づかずに彼らにだけ無垢
な笑顔を振りまいていたに違いない。

そうやつて日々を過ごしてきた黒崎くんだつたが、鳴りを潜めたはずのいじめはまだ終わつていなかつたんだろう。

色黒の子たちが気づかないところで傷つく黒崎くん。

そんな彼を救つたのは眼鏡の彼だつたんだ。

きっと彼は、ただ守るだけじゃ黒崎くんのためにならないと、断腸の思いで涙をのんで黒崎くんにきつくながらも彼の成長を促していつたんだろうな。

そしてそれを知つた色黒の子や着物の人もまた、ただ黒崎くんを守るだけではなく彼のためにいじめられない方法を教えたりしたのかもしれない。

その結果、黒崎くんは髪をオレンジ色に染めたことで周囲が見て不良になつたと思われるようになつたんだ。

だが髪を染めたからと言つて本質まで変わるわけじゃない。

だから彼らは黒崎くんの周囲でいつも一緒にいるようにしているのだろう。

クラスメートの2人はそれでいいかもしぬないが、着物の人は違う。

彼はおそらく時代劇の役者か何かなのだろう。

いつも黒崎くんの近くにいられないからこそ、もしかしたら誰かに頼んで見守らせておき、黒崎くんが1人の時に問題が起こらないようにしていたのかもしぬない。

そしてそんな警戒網の中で、黒崎くんが接触したのが俺だつたわけだ。

今までまったく交流のなかつた俺と黒崎くんだから、着物の人も慌てて確かめに来たのだろう。

もしかしたらみんなで結託して黒崎くんがそつちへと目覚めるよう仕向けていたのかもしれないな。

そして着物の人最後に言つた「私を楽しませてくれ」つてのは、そんな揺れる黒崎くんを見るのも楽しいことだ。

だが、心配は無用だ着物の人。誰もいないから聞こえないわけだが、あえて言わせてもらおう。

俺は他人事なんであればボーアイズ・ラブにも理解がある！自分ではごめんだが。

答えが出てしまえば簡単な事だ。

着物の人言つてた排除しようとしていたというのは、俺がノーマルだから勝手にその倫理観を刷り込まれると困ると思つて慌てて來たんだろうな。

想定していた成長からの逸脱や変化というのも、「男の子同士が好きになる事は普通の事だよ」って価値観を植え付けているところに「やつぱりこれおかしいんじや？」と思わせられると困るつて事だ。ただ、それはそれで楽しみの1つにしてるっぽい感じでもあつたが。だが、着物の人の目的の礎になつてもらうつて言つてたから、おそらく俺も含めて外堀を埋めてしまおうとしているんだろうな。

考えてみれば色黒の子も着物の人も眼鏡の子もみんな「攻め」つて感じがする。

対して黒崎くんはどうだ？髪の色を変えようが妄想癖があろうが根本は変わらない。

そして俺の前世での知識を披露したら、すぐさまそれに対するように死神とかなんとかを妄想して作り出し語つて聞かせてきた。

おそらくは昔から1人で想像しながら過ごしてきた産物だろう。その時点で彼が大人しい頃と変わつていない事は明らかだ。

ならばやはり黒崎くんは「受け」なのだろう。

…え？まさか黒崎くんが俺に話しかけてきたのつて、まさか違うよ

ね？

周りの誰にも言えなかつた妄想を嬉々として話してゐるけど、俺にそつちの気はないよ？

てかちよつと知らない相手が近づいただけで飛んできたり、いつも一緒にいるような重い気持ちの人たちに気疲れして、たまには羽を広げて目一杯妄想話がしたかつただけだよね？

ああ、そういうことか。そうやつて黒崎くんが話してゐるのを、矢印を飛ばしてると勘違ひしたのか。

そりや黒崎くんも疲れて妄想に浸りたくなるよね。

茶髪の女の子がどういう立ち位置なのか知らないけど、もしかしたら黒崎くんはその女の子に癒やしを求めたりしてゐるのかな？

いや違う！たぶんだが茶髪の女の子はそんな黒崎くんを見て楽しんでいるのかもしれない！

勝手な推測だがたまに黒崎くんを見る目がキラキラしてゐる感じがしてたし、あれは色黒の子との絡みや、心配だけど素直に言えなくてついついきつく当たつちゃう眼鏡の子のツンデレ具合を想像してキラキラしてたんだ！

そう考えれば着物の人が飛んできたのも、黒崎くんが急に俺に話しかけてきたのも、黒崎くんの周りに色黒の子や茶髪の女の子がいるのも全部辻褄が合う！

どうしよう…なんかすつごく重い事実を知つてしまつたようだ。
だからと言つて黒崎くんがせつかく楽しめる俺との話を終わらせてしまふのは彼に申し訳ない。

偶然ながらもこんな重い事実を知つてしまつた以上、俺にできることは今まで通り黒崎くんの話に付き合つてあげるだけだ。

だがすまない着物の人。俺からそつち系の話を黒崎くんにする気はない。

だから俺を使って外堀を埋められるとは思わないでくれ。

そして今更な事なんだが着物の人から言われて1つわかつた事が
ある。

黒崎くんの名前が黒崎苺だつたんだよ…

男の子にその名前はさ、そりや子供の頃からいじめられても仕方ないよ。

てか親御さんもうちよつと考えられなかつたんですか：マタニティハイでそのままのテンションで名前決めちゃつたとかそんな感じだつたんだろうなあ。

父親のほうも止めなかつたつて事はお母さんのテンションに飲まれたか、同じ感性をしているのかどちらかだろう。

俺が言う事でもないけど、小さいうちは良くて大人になつた時にその名前で呼ばれるつて事もちゃんと考えてあげないとダメだよね。だつてもうお店で苺^苺が売つてたら「おい、お前が売つてるぞ」つてバカにされるの目に見えてるじyan：

てことは黒崎くんの性格はなるべくしてなつたつて事か。

妄想も死神設定とかだし、もしかしたら結構な闇を抱えているのかもしれないな。

てか彼もしかして生まれてからずつと不憫な人生送つてないか？

黒崎くんはただの厨二病患者だと思ってたけど、もうちよつと優しくしてあげたほうがいいのかもしれない。

「おい、こんなところで何してんだよ？」

「やあおはよう黒崎くん。何、改めて（黒崎くんに関する）衝撃の事実を知つてしまつた事にね。少しばかり動搖してしまつてたみたいだ」「あー、（実はお前が話してたのはほとんど幽霊だつたつて事が）衝撃だつたのは仕方ねえよ。俺だつていきなり（実は幽霊だつたなんて）言われたら衝撃だらうからなあ。信じられねえ気持ちはわかるぜ」「まあそうだよね。つてか黒崎くんも（矢印向けられる）当事者なのに結構普通に過ごしてゐよ。そのあたり気になつたりしないの？」

「そうは言われても（幽霊がいる事は）昔から知つてたからなあ。今更つて感じもするし。別に何かされるわけじゃないからいいんじやないかと思つてるな。それに今はお前も話を聞いてくれてるからな」「（昔から気づいていたのか…そして嫌悪している様子もない。黒崎くんまさか満更でもないのか!）俺にできるのは話を聞くくらいなんだけどね。申し訳ないけど（修羅場に）関わるのはお断りするよ。（ボーイズ・ラブの中に飛び込んで）うまく立ち回れる自信がまつたくなくてさ」

「（まあこの靈圧じやあ戦えねえもんな）それは俺の役目だ。お前は何も心配する必要なんてねえさ。ちゃんと（戦う）覚悟はできる」「そつか…そこまで（修羅場の）覚悟ができるのなら俺はただ黒崎くんを応援するだけだね」

「ああ、俺に任せとけ。虚に裏われた何かあつた時はすぐに俺が駆けつけてやるよ」

「そうだね。何かあつた時はよろしく頼むよ。ほんとにね」

ただ、2人で歩きながらも俺は思う。

まさか一緒に登校しただけで着物の人に嫉妬で嫌がらせとかされないよね？

後は色黒の子と眼鏡の子に見つかりませんように…：

そして茶髪の女の子には勝手に脳内カツプリングされませんように…：

俺は黒崎くんと話しながらも、内心ではそんな事を考えながら、そして厨二病発症だけじゃなくボーイズ・ラブまで発生していた黒崎くんの人生の平穏を願い、一緒に通学路を歩いていった。

目を覚ませ市丸くん

「藍染隊長まで気にする人間ねえ…ちょっとボクも拝見させてもらおかな」

着物の人がやつてきて黒崎くんに関する新しい事実を発見してからしばらく…

黒崎くんとは表面上ただのクラスメイトでしかないという風に頑張つて過ごしていた。表面上も何も実際ただのクラスメイトなんだけどさ…

ただ茶髪の女の子のカップリング妄想に参加させられてもたまらないし、色黒の子や眼鏡の子から勝手にライバル視されても困る。別に彼らの趣味嗜好をとやかく言う権利はないけど、そこに俺が勝手に参戦させられるなんて勘弁してほしいだけだ。

だがボーイズラブの神様は平穏な生活などさせてくれないつもりらしい。

今日もいつも通り由美ちゃんや顔見知りのみんなと軽く話しながら登校していただけなのに、この前の人とは別の着物の人が目の前にいる。

何も聞かなくともわかるよ。どう考えてもこの前の人との知り合いでしょう：

「君がウチの上司が気にしとった子やね。ほんま普通の子にしか見えへんねんけどなあ」

「俺に何か用事ですか？」

「ああ、君がボクの上司と話してるのを見とつてな。ちょっとボクも話してみたいなくおもてやつてきたんや」

ああ…あの着物の人の部下なんだ。でかこの人の喋り方で確信したわ。

ただのコスプレの人なのかなと思つてたけど、この人たちは役者さんだつたんだね。

目の前の細目の人の喋り方は京都弁っぽい感じだから、太秦あたりの時代劇俳優さんとかなんだろう。

羽織の背中に『誠』とでも書いてくれてたら新選組モノつてすぐわかるんだけど、どうやらこの人たちは違うみたいだな。

しかし上司の人はもう帰ったのに、なんで次は部下の人がやつてくれるんだ？

「あなたの上司の人はもう帰りましたよ？」

「それはわかっどるよ。ちゃんと確認してから来どるからね」

「それなら俺じやなくて黒崎くんのほうに行けばいいのでは？」

「そんな邪険にせんでもええやん。ちょっとあの人とどんな話をしたか知りとうてな」

うん？ 黒崎くんじやなくて俺のところで上司の人が何を話したか
聞きたい…

マジカ：つまりこの人は上司狙いだつたのかよ！しかも俺とのちよつとした会話内容ですら知りたいとかガチすぎんだろ！男のヤンデレとか誰得なんだよ。

…ちなみにこの場合どつちが攻めでどつちが受けになるんだろ？黒崎くんが受けだから、上司さんは攻めになるわけで、そうするところの人は受けってことか。

受けのヤンデレなんて聞いたことないが、このNIPPONではそれが普通なんだろうか？

なんで朝っぱらからそんなヘビーな事態に巻き込まれなきやいけないんだ：

つまり上司の人は黒崎くんを狙つてて、部下の人は上司を狙つてるのか。見事に矢印が交差しない関係だなあ。

こういう人には嘘を言わずに正直に話しておくに限る。下手に隠

し事なんかすればちよつとした疑いだけで刺されかねないからな。

「話したのは黒崎くんの事を少しだけですよ。（黒崎くんの事を好きすぎて）ほんの少し話しただけのクラスメイトである俺の事まで確認しにきたみたいですね」

「なるほどなあ。ちなみにキミは黒崎クンのこと、どない思ってんのか聞かせてくれへん？」

「おいおい、まさか俺と黒崎くんをくつつけたら自分が上司と…っていう考えしてるんじゃないだろうな？」

なんなんだこの人たちは…俺はドガ付くくらいノーマルだぞ。黒崎くんと話してるのだけ、9割くらいは妄想の話に付き合つてるだけだ。

たまにアイデアが思い浮かばないことがあるみたいだからアドバイスというか、前世での漫画知識を披露することはあるがそれだけだぞ。

「黒崎くんの事ですか…普通にクラスメイトだと思つてますよ。そんなに話すことも多くないし、たまに彼の（妄想物語の）話を聞いたりアドバイスしたりする程度の関係ですから」

「（やつぱりキミが黒崎クンに何か吹き込んでるみたいやな）それならボクにもちょっとアドバイスもらわれへんかなあ？」

「それは言われても俺は（ボーイズラブの感情なんて）詳しくないですからね…それでも言わせてもらうなら、上司さんを狙うのは止めたほうがいいと思います」

「!?（コイツ…まさかボクが藍染隊長の命を狙つてるのを知つとる言うんか？）へえ？ボクがあの人の事を狙つてるなんて、そんなわけないやんか」

「言わなくともわかりますよ。（わざわざ京都からやってきて、ほんのちよつと話しただけの俺にまで何を話したのか聞きに来るくらいだし）正直なところ不毛だとは思いますけど、本気だけは伝わつてきましたからね」

「…不毛とは随分な言い方やな。ボクがあの人に敵わへんのはようわかつてるよ」

敵わないのはわかってる？もしかして元々は上司さんとこの人は付き合つてて、上司さんが目移りしたとかなのかな？

有り得そうな話だな。恐らくだが上司さんは黒崎くん育成計画の傍ら、つまみ食い程度のつもりでこの人に手を出したんだろうけど、残念ながらその相手が悪かつたってことだ。

まさかヤンデレ属性持ちだとは思つてなかつた上司さんは、最初こそそれすらも楽しんでいたんだろうけど徐々に興味を失つて飽きてきたんだろう。

あと考えられるのは、たぶんだが幕末とか時代劇の作中つてのは確か女人禁制とか普通にあつた時代だよな。役作りのつもりが本気になつてしまい……ってパターンつてことか？

もしくは俺は見た記憶がないが、この人たちが演じてるのがそういう映画だつたっていうのも考えられるかもしれない。

もし配役に入り込みすぎて元の自分と役がわからなくなつてるつてだけならまだチャンスはある。

きっとこの人だつて話せば元に戻つてくれるはずだ。いやもしも本気なんだつたら本人たちの気持ちの問題だから同性愛をどうこう言うつもりなんてないんだけど、できればそういうのは俺の関係ないところでやつっていてもらいたい。

それにこのままだと黒崎くんを中心にして刃傷沙汰になりかねないしな。

気持ちだけは平和的に話し合いでどうにかなることではないつてわかつてゐつもりだし、もうすでに色黒の子や眼鏡の子と上司さんで泥沼一步手前くらいまで来てそうなのに、そこにあなたまで入つたら茶髪の子のご飯が更に進んでしまう。

ならば俺に火の粉が飛んでくる前に少しでも燃料は減らしておかないといけない。

「わかつてるなら言わせてもらいますが、あなたの言う通り、あなたじゃあ上司さんには敵いません。あの人は俺が話しただけでも下準備は念入りにして（黒崎くんの性癖が）自分好みになる過程も楽しむタイプでしようけど、あなたは（ヤンデレだろうから上司さんの心を）

取り戻したいと思つたらそれしか考えず周りが見えなくなつてゐるっぽいですし」

「（取り戻したい：ねえ）ほんまようわかつとるみたいやね。でも…そこまで知られてるのはちよおつと都合悪いなあ…」

なんかこの人の雰囲気が変わつたような…やべえ、ヤンデレ状態の人に諦めろつてのはやつぱり地雷だつたのか!?

そういう前世でもゲーム内でヤンデレキャラに刺されてバツドエンドなんてよくあつたわ…これはマズイ氣がする。もう説得とかしてる場合じやない。

「おつと、話は最後まで聞いてください。あなたは（上司さんの心を自分の元に）取り戻したいんでしようけど、求めてばかりではいけません。あなたの大切な人はあなたに何を求めていますか？自分が求められているものは何かを考えることも必要だと思います」

「（乱菊がボクに）何を求めているか…？」

「ええ、そうです。あなたの（上司さんに対する）独りよがりな求愛ではなく、^{上司さん}相手があなたに何を求めているのかを考えてみれば、きっと今までとは違う視点で見えてくるものもあると思いますよ」

「…独りよがりなんはようわかつとるけど、それを求愛と言われたんは初めてやなあ。キミには（乱菊の魂を取り戻す事が）求愛に見えるということか」

見えるも何も、ヤンデレの行動原理つて「相手の全部が欲しい」みたいな感じじやなかつたつけ？

あと髪の毛とか食べさせて自分と相手が混ざり合う的な狂気的な愛情の事を指すもんだと思つてたんだけど、やつぱり自分では気づかないものなのかな？

なんか嫌な予感がして、思わずアドバイス的な言い方をしてしまつたが許してくれ。俺だつて男同士の痴情のもつれで刺されてバツドエンドなんて嫌なんだ。

それにこれは悪いアドバイスではないはず。この人が刃物振り回して「あなたを殺してボクの死ぬ！」とかやりだす前に少しでも考えてくれればいいんだから。

もしそれでも刃傷沙汰になるなら撮影所のほうでやつてください。

俺はそれを見てご飯が進むような人間ではありませんので。

「黒崎クンがキミにいろいろと相談するわけやね。ボクもちよつと

(キミに対する) 認識を変える必要があるみたいや」

「それほどではありませんよ。それに俺にはあなたたちの事を理解できているなんて間違つても言えませんからね。黒崎くんには少々同情してしまう部分もありますが、俺にそれを解決するような方法があるわけでもないです」

「黒崎クンの事もわかつとるわけか…ちなみにどこまで知つとるん？」

「どこまでと言われても難しいですが、彼が難儀な星の下に生まれてしまつたなあ…程度ですよ。彼の半生を考えると、言つてはなんですが俺では耐えられなかつたでしよう」

「(難儀な星の下に、半生を考えるとねえ…つまり藍染隊長の計画もお見通しつちゅうことか) キミが彼にアドバイスを送るのはそういう理由からつちゅうことか」

いや最初はそんな理由を知らなかつたから、どちらかと言うと話に付き合うだけ付き合つて早く帰りたかつただけだつたはずだ。

ただ彼の境遇というか、同性愛者になるべく育てられたような人生を知つてしまい、哀れみのような気持ちがあることは否定しない。

そこで唯一の逃げ場である妄想世界まで否定してしまつては、黒崎くんはもう考える自由すらなくなつてしまふと思うとね。

しかしノーマルな人間の少ない世界だなあ。もしかしてこの世界にはM A R I N E R Aとかあるんじやないだろうな…

俺みたいなマトモな人間には住みにくい世界とかやめてくれよ。

「キミと話せて良かつたわ。まさか独りよがりの求愛言われるとは思わんかったなあ。ちょっと(乱菊が何を求めてるのか) 考えてみることにするわ」

「ええ、そのほうがいいでしよう。相手のためを思うのは大切な事ですが、必要なのはそれを相手が望んでいるのかということだと思いま

す。あなたの大事な人はきっと（ヤンデレバツドエンドなんて）望んでないと思いますよ」

どこまで俺の気持ちが通じたのかわからないが、この人も少しは落ち着いて俺の話を聞いて考えてくれるみたいだ。

できればこのまま健全な世界で役者として大いに活躍してもらいたいものだ。上司の人だつて本命が黒崎くんだろうから、この人がノーマルに戻つたとしても喜びこそすれ怒りはしないだろう。

着物の部下の人の表情を見るに、どうやら少しは違つた考え方があることを理解してくれたみたいだ。

俺も学校へ行く途中だし時間があまりない事を察してくれたのか「それじゃボクはもう行くわ。キミとはまた話してみたいなあ」と言つて京都へ帰つていった。

次に会う時は舞妓さんでも芸妓さんでもいいから、仲の良い女の人ができたとかそういう話を聞けるといいな。

しかし俺もよく巻き込まれるもんだな：元々声をかけられやすいつてのはあるんだろうけど、黒崎くんと関わつてから増えたような気がする。これもある意味人気者なのかもしれないけど、でもみんな話をするだけで一緒に何かをすることはないんだよな。

通学路でよく会うケガしてるお姉さんだつて未だに連絡先を教えてくれないし、由美ちゃんだつて電柱のところで話すことはあるけど気分転換にと遊びに誘つても来てくれない。

声をかけてくるくらいなんだから嫌われてるわけでもないはずだし、恥ずかしいってこともないと思うんだけど理由がまったくわからん。かと言ってあんまりしつこく誘つたりするのも事案になりそうだからやるわけにはいかない。

「おい、あんまりチンタラ歩いてると遅刻しちまうぞ？」
「やあ黒崎くん。君もヘビーな星の下に生まれてるよね」

「なんだよいきなり。確かにいろいろとあるけど、やることは変わらねえからな。お前も（そんな小さな靈圧で）何かしようとするなよ？」

俺が護つてやるからさ」

「（やる？願わくばそれがやるじゃないことを祈つてるよ）大丈夫だよ。間違つても（君たちの入り乱れる矢印に）首を突つ込もうなんて思つてないさ。これでも自分の身の程はわかつてゐつもりだよ」

この時、俺はわかつてゐる氣でいただけだと後で思い知らされることになる。

しばらくして京都からあんなにたくさん役者さんたちが相談に来るなんて思わなかつたんだ。